

森鷗外：文化、文学の対決—留学を通して

昨年に引き続き、2012年に入ってから曲亭馬琴と森鷗外の文学というテーマについて研究してきた。私が特に興味を持ったこの二人の作家の共通点を探りながら、馬琴と鷗外の作品をできるだけ多く読むことに挑戦した。両者の作品の多くは、文語体で書かれているだけでなく、漢文もよく現われる。フィレンツェ大学で現代日本語を勉強してきた私は、群馬大学にいる限りに研究テーマに関する科目を一つでも多く受講してみようと思った。たとえば今回の留学では、古代から明治に至る日本語の歴史をテーマとする授業を受けたことによって、古典文法の知識が深まった。

江戸時代の作家である馬琴を研究するためには、直接原文を読むことも必要である。現在出版される書物は綺麗な読みやすい明朝フォントで印刷されているが、江戸時代の資料の数多くが崩し字で書かれている。書体の問題に限らず、いわゆる変体仮名は大正11年まで生き残るとされ、馬琴を研究する人はもちろん、鷗外の研究にもそういった知識が必要だといえる。そういう訳で2012年前期の授業で江戸時代の噺本(はなしぼん)を中心とする授業で崩し字や変体仮名を覚えながら、同時代の文法と言語の特徴を勉強することが出来た。

さらに、個人的に深く興味を持ったテーマであるだけでなく、馬琴と鷗外の作品によく用いられ、知らないといけないことだと判断して漢文を勉強した。

大学の授業に通いながら『南総里見八犬伝』と『椿説弓張月』を手元にして読み始めた。両方の作品の序文は漢文で書かれていて、諸橋の『大漢和辞典』を参考にしながら読む途中である。それと同時に森鷗外の各面を調べている。まず森鷗外は西洋について非常に詳しかった。小説を書く以前には、ドイツに留学していたり、ヨーロッパの文学作品を日本語に翻訳するなどした。特に彼の翻訳は、詩歌の場合、同時代の文学界に革新的な力を持った。音声的、形態的に日本語と異なる西洋の各言語の修辞を自分の国の言葉にどういう訳し方が出来るかという問題に立ち向かって、様々な方策を立てる。韻に基づく西洋の詩を日本語に取り入れる実験をしたり、中国語の声調で表したり、意味に焦点を当てる場合に伝統的な五七調を使ったりして、同時代の詩人に多大な影

響を与える。鷗外はヨーロッパのノベルという文学形態に親しんだおかげで、坪内逍遙の「小説真髓」の革命を経験した日本に、更に新たな風を吹き込んだ。西洋の影響に限らず鷗外は晩年、東洋の歴史や伝統に傾倒している。

これら森鷗外について調べて来た様々面を紹介していきたいと思う。

森鷗外、本名森林太郎は石見国津和野(現在の島根県津和野町)に生まれる。鷗外の小さな頃は母親が息子の教育を担当して彼に漢文学を深く学ばせる。二世代の仕事を継ぐつもりもあって、鷗外は医学の勉強を初め、医学の世界に広く使用されるドイツ語も学ぶ。1877年に東京大学医学学科に入学して1881に卒業するが、最終試験には鷗外の成績は全ての卒業生の中の8位に過ぎない。あの時まで大学で卒業した学生の中一番若いのが、高位に至らないことは鷗外にとって衝撃的なことである。

ヨーロッパは医学の研究が優れており、鷗外にとっては医学と西洋は強く関わる。自分自身本場で経験しなければ完全に理解が出来ず、他人の論にも自分なりの解釈をして満足してしまうので、留学することは必要であると感じた。鷗外自身はこういう気持ちを日記に記録する。

明治十七年八月二十三日。午後六時汽車發東京。抵横濱。投於林家。

此行受命在六月十七日 赴。德國修衛生學兼詢陸軍醫事也。七月二十八日詣闕拜天顏。辭別宗廟。

八月二十日至陸軍省領封傳。初余之卒業於大學也。

蚤有航西之志以爲今之醫學自泰西來。

縱使觀其文諷其音而苟非親履其境則郢書燕說耳。¹

森鷗外にとって医学を勉強する本当の目的は、ヨーロッパへ行くことであるというのは過言かもしれないが、ドイツへ留学する希望が強いのは確かである。大学の最終試験の結果では文部省の奨学金を得る事は不可能だったので、鷗外は留学する目的を達するためには軍医にならざるを得なかった。しかしここで、家族の支援を得、様々なつながりが出来る。大学時代の鷗外の同級生小

1 森鷗外「航西日記」『森鷗外全集』第三十五巻、75頁。

池正直は友達を助けるため石黒忠恵に推薦状を送る。この推薦状は、長いが内容は非常に興味深く、上手く鴟外の性格を表しているので全てを引用したいと思う。

石黒忠恵閣下僕友人の為に私かに閣下に乞ふ者有り、僕聞の凡邦家之事は、知りて言はざるは忠を為すなし、又聞く一人その所を得ざるは君子の以て憂と為すところと。僕に一良友あり、森林太郎と云ふ。年齒廿有一、僕と同窓なること十年、今俱(とも)に全科の試問を卒ふ。森氏の人となり敏にして學を嗜む。傳聞強記にして英才卓犖す、慷慨悱憤して、常に西醫の陸染を以て憂と為す。曾て僕に語りて曰く、夫れ西土遙渺として、氣候風俗同じからず、服食器用相殊なる、其醫學の一事も亦安んぞ盲信警頌すべきや、しかりといへども彼は其科を設けて既久し、經驗已に熟せり、我しばらく之を學びて他日我教を立つる之資と為さん亦可ならずや、と。其志の向ふところ高遠にして世の醉洋者と異なること大率(おおむね)此の如し。故に氏は攷々として本課を勉むるの餘、優れて和歌詩文を兼ね學び皆至る所有り、又旁漢家方書を搜て遺す所無し。蓋し皆後日益世之用に供せんと欲する也。其材幹此の如く、其學力斯の如し。而うして今次試問に於て成績甚其れに反するを見る。凡そ試問の對策には大に倖と不倖と有り、況んや森氏の性朱氏と相合はず、朱氏の性孤峻偏隘、峭しく畛域を設け、もし片言隻語其教ふる所の違ふあれば輒咆哮勃怒して、同異に就いて指趣を究むることを肯んぜず、然うして森氏苟くも意を邀へ以て其氣を買ふことを欲せず、専ら其術を活用せんことを欲して言往々我國産の醫用に供すべきものに及びて忌憚あるなく、是を以てしばしば朱氏の意に觸る。此おそらくは其成績を貶しめし原(もと)なるか。然りといへども校内に自ずから公論有り、此區々たる點數は本と兒戲、固より以て未だ森氏の眞價を減ずるに足らずといへども、若し人の之を察せざるありて、徒らに其の點數につきて氏を評すとせばひとり氏の不幸なるのみならず實に國の不幸なり。夫れ萬卒は得易く一將は得難し、鷲鳥百を累るとも一鶚にしかず、方今洋學生徒は車載斗量、數ふるに勝ふるべからず、鶯鶯の音、蟹行の文は誠に能く之を解すといへども、自國の學に至りては則ち憤々たり朦朧たり、且つ其心概ね守る所無し、言苟くも洋人の口に出ずれば則ち瓦玉薰蕕を擇ばず、皆之を適奉し、利害緩急を問はず盡く濫りに之を施す、其弊言ふべからざるものあり。獨り森氏屹然と立ちて其間に於て其弊に染まず、其豈夫一將一鶚其人を得たるものにあらずや。此人蓋し千里之才なり、もしよく之を用ふれば、將に我醫道を興すべく、彼跳染を制し邦家の益亦大ならずや、而うして尚屈して槽檻の間に在り、以て白樂之顧を持つことただこれこひねがふのみ。

閣下の明森氏をしてよく其の所を得せしめ、而うして其驥足を伸べしめよ、區々の情黙してやむあたはず、敢えて以て薦む、正直誠惶誠懼頓首再拜

明治十四年四月初七日。²

文章にある「朱氏」という人は Emil A.W. Schultze である。大学で鷗外と Schultze の間では口論が多かったらしく、小池によると試験の不良な結果はそれにも関わるそうである。

小池の推薦状のおかげかどうかは知れないが、明治 14 年 12 月 16 日に陸軍軍医副になり、軍隊に入ってから明治 17 年 6 月に衛生学を修めるとともにドイツ陸軍の衛生制度を調べるため、ドイツ留学を命じられる。明治時代の他の有名な作家夏目漱石もほぼ同じ時期にヨーロッパへ留学するが、彼とは違い、鷗外は医学の源である憧れのヨーロッパで幸せな時間を過ごす。

鷗外はドイツ留学の初め、ベルリンに到着してから 3 日目の明治 17 年 10 月 13 日、当時のドイツ公使、青木周蔵に会いに行く。「容貌魁偉にして髭多き」公使は鷗外に次のように言ったと『独逸日記』は伝えている。

衛生学を修むるは善し。されど帰りて直ちにこれを実施せむこと、おそらくは難かるべし。足の指の間に、下駄の緒挟みて行く民に、衛生論はいらぬ事ぞ。学問とは書を読むのみをいふにあらず。欧州人の思想はいかに、その生活はいかに、その礼儀はいかに、これだに善く観ば、洋行の手柄は充分ならむといはれぬ。³

ドイツでは青木周蔵の忠告に従って鷗外は同時代のヨーロッパ、特に上流階級の雰囲気をよく味わうことをする。留学中、医学だけでなく、鷗外は深く同時代ヨーロッパの各面を研究して、翻訳が盛んであった 19 世紀のドイツで、ドイツ語を通して様々な欧州の文学作品を深く読んだ。

しかし、西洋のみならず、ドイツで自国の文化や国際的な位置を考察する機会も少なくない。例として鷗外の思考に大きく影響を与えたエドムント・ナウマン (Edmund Naumann) との出会いもドイツ留学の時代に起きる。

明治 19 年 3 月 6 日、ドレスデンで行われた地学協会の年次講演会において、居合わせた鷗外

2 『男爵小池正直傳』、小堀圭一郎『若き日の森鷗外』6-7 頁に引用。

3 森鷗外「獨逸日記」『森鷗外全集』第三十五巻、87-8 頁。

は、日本で技師として10年間を過ごしたエドムント・ナウマンの口から、祖国日本に対する軽蔑的な発言を聞くことになった。

六日。夜地學協會の招に應じ、其年祭に赴く。此夜の式場演説は日本と云ふ題號にて、其演者はナウマン Edmund Naumann なり。此人久しく日本に在りて、旭日章を佩びて郷に歸りしが、何故にか頗る不平の色あり。今三百人餘の男女の聽衆に對して、日本の地勢風俗政治技術を説く。其間不穩の言少からず。例之ば曰く。諸君よ。日本の開明の域に進む状あるを見て、日本人其開明の度歐洲人に劣れるを知り、自ら憤激して進取の氣象を呈はしたる者と思ひ玉ふな。是れ外人の為に逼迫せられて、止むことを得ず、此狀を成せるなりと。又其結末に曰く。是にて先づ日本形勢の概略を演じ畢れり。今一笑話を以て結局とせん。或る時日本人一隻の輪船を買ひ求めたり。新に航海の技を學べる日本人は、得意揚々之に上りて海外に航したり。數月の後、故郷の岸に近づきしに憐れむ可し、此機關士は機關を運轉することを知りて、之を歇止するを知らず。近海を逍遙して機關の自ら休む時を待てり。日本人の技術多く此の如し。余は他日其弊を説せんことを望むと。余はこれを聞きて平なること能はずと雖、是れ實に今夕の式場演説にして、人の論駁を容さず。余は懊惱を極めたり。ロオト余が色を見て我前に至りて曰く。君不平の色あり。何の故ぞや。余を以て觀れば、ナウマンの論は大に日本將來の開化を願ふ意あり。頗る妥當なる者の如しと。余以為らく、ロオト日本開明の度を知らず、故にナウマンの言を以て宜きを得たりと為す。ロオトの有識を以てして猶且此の如し。況んや他人をやと。余の不平は益々加はり飲啖皆味を覺えず。⁴

鷗外は日本に対するナウマンの見解に大きく刺激される。同時代ヨーロッパ人の視点から見ると日本の欠けている所は技術に限らない。ヨーロッパの人々は日本の開明が遅れている理由は日本の風俗にもあると考えていると分かる。数ヶ月後鷗外はドイツの新聞にナウマンに応酬する機会があるが、鷗外にとってはナウマンとの議論はその内容よりも、自国について更に研究するきっかけとなったことは重要であろう。歴史や伝統を知らなければ日本の風俗を弁護することができず、若い鷗外は日本研究にも熱中する。ヨーロッパは生涯彼の人生の中心であるが、時間を経て、晩年に入ると鷗外の文学は徐々に西洋から離れて、伝統的な日本に向かってしまう。

4 森鷗外「獨逸日記」『森鷗外全集』第三十五卷、132頁。

伝記的な出来事から離れて、もっと文学的な視点から見ると、ドイツの影響は鴎外が残した数えきれない翻訳の中に現れる。私の研究は特に『於母影』と言う作品を中心にした。『於母影』には鴎外が日本語と大きく異なるドイツ語を訳すために色々な工夫をこらしているのが伺える。意味を訳す事は言うまでもないが鴎外は詩を翻訳する時、調や韻などを表す方法も実現してみせる。具体的な例を挙げ、これらを見ていきたいと思う。⁵

原文韻を訳した言語の文にも移すことは、その工夫の一つである。『於母影』に選集される「オフェリアの歌」を見てみよう。

オフェリアの歌

ドイツ語	鴎外の日本語訳	韻
Wie erken ich dein Treulieb	いずれを君が恋人と	A
Von den andern nun	わきて知るべきすべやある	B
An dem Muschelhut und Stab	貝の冠とつく杖と	A
Und den Sandalschuhn.	はける靴とぞしるしなる	B
Er ist lange tot und hin	かれは死にけりわが姫よ	C
Tot und hin, Fräulein!	渠(かれ)はよみじへ立ちにけり	D
Ihm zu Häupten ein Rasen grün,	かしらのほうの苔を見よ	C
Ihm zu Fuss ein Stein.	あしのほうには石立てり	D
Sein Leichenhemd weiss wie Schnee zu sehn	柩をおほふきぬの色は	E
Geziert mit Blumensegen	高ねの雪と見まがいぬ	F
Das unbetränt zum Grab musst'gehn	涙やどせる花の環は	E
Von Liebesregen	ぬれたるままに葬りぬ	F

韻というのは多くのヨーロッパの言語に使われているが日本語の言語的な特徴に使いにくい手法である。鴎外の結果は原文のリリズムに至らず、ある意味で詩的に成功しない歌に過ぎないと言えるかもしれないが、全く新しい形態で、文学界に新しい可能性を開いたメリットがあるに違いない。

もう一つの感動的な工夫は、中国の4つの声調を使ってドイツ語のリズムを真似ることである。

5 以降の詩や歌は全て『森鴎外全集』第十九巻より引用されている。

これは「月光」などの歌に見られる。

月光

— — — — —
Dein gedenkend irr' ich einsam

思 汝 無 已 孤 出 蓬 戸

— — — — —
Diesen Strom entlang;

沿 岸 行 且 吟

...

「曼弗列度」にも同じ工夫が使われるが、バイロンのマンフレッドの英語が原文になる。

戯曲「曼弗列度」一節

— — — — —
ge the moon is on the wave,

波 上 織 月 光 糾 紛

— — — — —
And the glow-worm in the grass,

螢 火 明 滅 穿 碧 叢

...

他の詩歌には意味を訳しながら日本の伝統的な韻律、短歌(5・7・5・7・7)や今様(5・7・5・7)などが使用される。原文の意味を伝えながら、日本人が親しみやすい形をとるこのような翻訳方法は、日本の読者には一番効果的であると言えるだろう。

森鷗外という様々な言語、分野に至る知識を持った偉大な文学者を、一つの論文にまとめる事はおそらく不可能だが、人物の体験や以後の小説を背景にして、イタリアで十分研究されていない問題を絞って調べてきた。まだ完成している研究ではないとはいえ、これからの研究の基準になることを信じ、今後も更に研究をすすめていきたいと思っている。